

■ 洪沢敬三 実業家。経済界のエリートながら、日本常民文化研究所を開設、民俗学の領域で先駆的役割を果たした。

しづさわけいぞう

白馬会・・・1896＝

東京深川の生れで、\_洪沢栄一の孫。

日露戦争終・1905＝9歳：

明治天皇没・1912＝16歳：

大正政変・・・1913＝17歳：父篤二が廃嫡となる。

第一次大戦始1914＝18歳：初めて柳田国男と会う。

21ヶ条要求・1915＝19歳：第二高等学校に入学する一方、\_洪沢同族株式会社)の社長に就任。

大学在学中から穂積陳重、石黒忠篤、柳田国男などの影響を受けて、文化の基層を、支配階級を除いたごく普通の庶民すなわち常民の文化に求め、とくに漁業関係の社会経済史料に注目する。

原敬首相暗殺1921＝25歳：東京帝国大学経済学部を卒業し、横浜正金銀行に入るとともに、岩崎弥太郎の孫と結婚。\_アチック・ミュージアムの会合を開始。

関東大震災・1923＝27歳：ロンドン支店勤務のためイギリスに渡り、外遊中の柳田と会う他、ヨーロッパ各地の美術館・博物館を見学し、

治安維持法・1925＝29歳：帰国して横浜正金銀行を退職、

円本時代始・1926＝30歳：第一銀行取締役役に就任。\*アチック・ミュージアムを自邸の物置の2階に開設し、同好の士と民具や民俗資料の研究ならびに収集保存をはじるとともに、研究者の論文発表を支援。

満州事変・・・1931＝35歳：祖父栄一が死去して、子爵を継承。

五一五事件・1932＝36歳：父が死去。\*静養先の伊豆で内浦漁民史料を発見し、祭魚洞文庫、漁業史研究室を開設。以後、漁業水産関係の文献の収集、漁業史の研究につとめるなど民間研究所の主宰者として、既存のアカデミズムの枠にとられない自由な発想のもとに、ほとんど官学の手をつけない分野を対象とした民俗学、民具学や漁業史の領域で先駆的役割を果たす。

帝人疑獄事件1934＝38歳：{日本民族学会}設立に参加して理事に就任。

日中戦争始・1937＝41歳：\_豆州内浦漁民史料。東京保谷に{日本民族学会}附属研究所を開設して、アチックの民具を移管し、

第二次大戦始1939＝43歳：\_民族学博物館も開設。

日米開戦・・・1941＝45歳：第一銀行副頭取、

・・・1942＝46歳：{アチック・ミュージアム}を{日本常民文化研究所}と改称。<戦時体制>での民意の結集を図るべく懇請されて、日本銀行副総裁に就任。

創価学会検挙1943＝47歳：母が死去。

年金+総武装1944＝48歳：\_「日本魚名集覧」。日本銀行総裁となり、

敗戦・・・1945＝49歳：<敗戦>後は幣原喜重郎内閣の大蔵大臣となるが、

新憲法公布・1946＝50歳：\*公職追放。以後、家出した妻と別居し、元執事の家に住んで畑仕事に専念しながら、

極東裁判決・1948＝52歳：\_「ミナカタ・ソサエティ」を設立して代表。

三大事件・・・1949＝53歳：水産庁に{水産資料館}設置を進言して採択され、

朝鮮戦争始・1950＝54歳：\_「日本常民文化研究所」が財団法人となる。

独立回復・・・1951＝55歳：「南方熊楠全集」を刊行。追放解除となって{経団連}相談役に就任、

TV放送始・・・1953＝57歳：{国際電信電話}社長。\_「十和田科学博物館」を開設。

国連加盟・・・1956＝60歳：{文化放送}会長・{国際電信電話}会長。\_「日本モンキーセンター」初代会長。

なべ底不況・1957＝61歳：外務省の移動大使として中南米各国を歴訪、

美智子妃・・・1959＝63歳：

安保闘争・・・1960＝64歳：旅先の熊本で発病、

タイタイ病始・1961＝65歳：回復して、\_「小川原湖民俗博物館」を開設、

全国総合計画1962＝66歳：再び入院し、アチックの蒐集民具を文部省史料館に移管、

TV宇宙中継始1963＝67歳：\*朝日文化賞を受賞し、父の三十三回忌供養で「瞬間の累積」を発表後、糖尿病に腎萎縮を併発して没した。多くの歴史家や民俗学者を育てたほか、九学会連合調査などの共同研究を支援、また文部省史料館、水産庁水産資料館、国立民族学博物館の設立に貢献するとともに、「絵巻物による日本常民生活絵引」などすぐれた編著を多く残す一方、金融制度調査会会長となるなど、経済界の指導者としても活躍した。